

大原幽学への視角

柴田武雄

A Note on Yugaku Ohara, a peasant leader (1797-1858)

by Takeo Shibata

1

大原幽学の研究は、専門の史学者たちが関係史料に学的照明をあてることによって、大きな成果をおさめるようになって来た。従来不明になっていた多くの事柄がだんだんはつきりとして来たことは、ともかくよろこぶべきであって、ながいあいだ一部の崇拜者がわが仏尊し式に神聖視していた幽学の実像がかなりはつきりして来た感じである。特に昭和五十六年十月、木村礎氏がその一門の研究陣を動員してまとめられた「大原幽学とその周辺」の大作は、画期的な収穫として大きく評価しなければならぬ業績といふべきであろう。木村氏はこの研究において、幽学の伝記の究明、思想の解析、農民指導・農村改革の実態の把握、そして、性学仕法の性格とその歴史的展開の様相から受難にいたるプロセスを明確に説述され、さらに幽学死後の性学の動態については、未到の研究分野に進出して、今まで知られなかった許多の新事実を明らかにされている。そのほか、幽学門生の活動、信州性学の様相、下総国学との関連など、いたれりつくせりの行きとどきかたである。大原幽学と性学に関する研究は、これによって大きな重い基石が据えられたことになり、その意義はまことに大きいものがあると思う。深く敬意を表させていたいただきたい。

さて、木村氏らは右の研究において幽学関係の史料はあさりつくされ

たようで、浅学のわたしなどは全くあれよあれよと驚くばかりであるけれども、そのわたしの手元にも、まだ世に出ない新史料がいくらかはあり、また最近、木村氏も検討し使用されている千瀧町諸徳寺の菅谷豊三家所蔵の史料を借覧する機会も得られたので、それらにもとづいて、ここに二、三の解明をこころみたいと考えるのである。

ところで、菅谷家は性学については重要な関係をもつ家である。性学といえば、すぐ口にされるのは、幽学の後継者だった遠藤良左衛門亮規の出た千瀧町長部の遠藤家のことであろう。周知のとおり長部は性学のメッカであり、幽学が根拠を据えたところである。その幽学を長部に連れこんでここに定住せしめたのは、良左衛門の父の伊兵衛であり、この伊兵衛こそ放浪途上にあった浪人学者大原幽学を下総の地に引きとめ、民衆の自主活動を始動せしめた発端人である。この二人の出会いこそ重大である。幽学は伊兵衛に農民の真姿を見、伊兵衛は幽学に人間の師の典型を見たのである。それは正に運命的な出会いであった。その出会いの時期は天保三年（一八三二）の夏ごろであったが、幽学が長部入りに踏みきったのは、それから五年後の天保八年（一八三七）八月のことであったと思われる。ここに幽学と遠藤家の切っても切れない縁が結ばれたのである。かくて、遠藤家は性学の真柱となった。長部は二十戸あまりの小村であったが、それに接して、長部の倍ほどの大きさがある諸徳

寺という変わった名の村があった。この名主で組合村の大惣代などをやっていたのが菅谷家で、その五代目の当主を又左衛門政成といい、これが遠藤伊兵衛と同じタイプの筋金入りの農人であった。そして、直ちに両者は共鳴して、幽学の支持者となり、信奉者たるを誓った。これで、性学の柱は二本となり、この二本は堅く結びついて、いかなる困苦にも離れることがなかった。やがて柱はもう一本できた。それは、ちょっと離れた九十九里寄りの十日市場村（現・旭市十日市場）の林伊兵衛という人物である。これは商人であり理財家であるとともに、根性のある情熱家だった。伊兵衛は少しおくれたが、幽学に入門し、林家は性学経済を支える強力な柱となった。こうして、性学の三本柱がそろったのである。人呼んでこれを「性学御三家」ともいうが、この三家の属する村が性学の「親村」として性学一門に公認されたのが、天保十一年（一八四〇）四月のことである。性学はこの三本柱を基軸として、その強力な活動を展開していったのである。菅谷家が性学の名門たるゆえんもおのずから理解できるであろう。

2

大原幽学に関する基本的史料は、八石性理協会保管の遠藤家文書であるが、菅谷家所蔵の約三百点にのぼる文書も貴重なものである。今、その内容をくわしくのべる余裕をもたないが、ごくかいつまんでいえば、思想関係のものでは、例の「微味幽玄考」の巻一から巻三まで各二、三部ずつ保存されているが、これを念のため校合してみたところ、いわゆる八石種本（八石性理協会所蔵本）と同じものもあるが、中には種本と文章がかなりかわっているところや、種本にない文章が幾個所も挿入されたりしていて、それらが幽学の自筆によるものかそれとも他者の恣意によるかは、今後検討を要することと考えられるのである。次に、「義論集」関係のものの中に、「性学中義論記」と題する一冊（四百字詰原稿用紙に書き直して五五枚ほどのもの）があるが、これは「義論集」の初稿本

といていいものと思われ、幽学自身の述作（ただし、自筆本ではない）にちがいないものようである。「義論集」は全四巻であるが、この「性学中義論記」は巻一、巻二にあたるもので、本文にはかなり欠けた部分がある。その欠けた部分は後に書き加えられたものと考えたほうがいいようであるが、「義論集」全四巻は遠藤良左衛門が序文を附して、「天保卯の春」つまり天保十四年（一八四三）三月にまとめられたものであるが、良左衛門の序文があるところから、文の執筆者も彼であるように考えられがちであるけれども「性学中義論記」中に「予曰（云）」「予答」とある「予」が、「義論集」では「先生」と改められてあることがわかる。

「予」とはもちろん幽学にちがいがいから、「性学中義論記」は幽学が執筆したものであり、したがって、「義論集」の一、二巻は幽学の書いたものであることは明らかであるといえると思う。これが判明したことは一の大きな収穫といえると考ええる。ただ、だからといって、「義論集」の三、四巻も幽学が執筆したものと考えていいかとなると何ともいえない。場所によっては、良左衛門が書いたらしく思われるところもあり、また、他の人、たとえば同じ長部村の人で筆の立った高木良蔵あたりが手伝ったらしく想像される個所もある。いずれにしろ、幽学自身の執筆書が基本となっていたことが明確になったわけである。なお、「義論集」は天保午年（五年）正月から同卯年（十四年）三月まで、九年間にわたる、幽学とその門人たち、門人同士、その他この地方の学者・僧侶・神官・武士等各方面の人たちの自由なディスカッションの記録であって、幽学が実学を尊重した人とはいえ、決して学制的思惟を拒否した人ではなく、むしろ自己の信ずる性学理論を多くの教養人の前に披瀝して、フリー・トークの過程を経て徐々に人びとの心に植えつけていったことがわかって、興味深く感ぜられるのである。ところで、これは小さいことだが、今書いたように「義論集」は天保五年正月の記事からはじまっており、「性学中義論記」も同じく天保五年であるが、両者の比較読みをやりな

が気がついたのは、この「五年」はどうも「六年」のまちがいのごとく思われるのだ。小さいことのように思えるけれども、こんな発見ができたのも、わたしにとってはいずれの事実である。

思想関係のものとしてもう一つ、「性学微味」という冊子が二巻あることも注意をひいた。これは「幽玄考」のダイジェスト版といふべきものだが、幽学の著述であるかどうか何ともいえない。それに、この冊子は幽学の自筆ではない。菅谷家では手習所を開いていて、性学の文書をテキストにしていたフシがあるから、前記の又左衛門政成の子又左衛門政興（この人は次に書くように日記・聞書の類をいろいろ書きのこしている。）あたりの執筆したものではないかとも考えられる。

ついでにもう一つ、幽学に「性学趣意」という著述がある。これは、「微味幽玄考」の前提的な論著であるが、その草稿本ともいふべき、幽学の自筆と思われる冊子が菅谷家にある。これは細字で認められ、消したところ書き入れたところが入り組んで、きわめて読みにくいものであるが、これを原稿用紙に整理書きしてみても、「大原幽学全集」所収の「性学趣意」と校合してみたところ、かなりの本文異同のあることがわかった。「全集」のものは清書本であると思うが、それでは、再稿本といふべきものがあつたということになるのだろうか。その間の消息について知りたくなってきた。

以上は、あまり面白くもない考証風の記述になってしまったけれども、よく考えてみると、幽学研究も今や考証学的考察を要する時期に際合しているようになってきたと思われるのだ。幽学文書をもっと早くおさめた「幽学全書」（第二版もあわせて）⁽¹⁾は校合がきわめて杜撰で、誤記誤植が多い上に、編者が勝手に語句を直したり削ったりしている形跡がかなり見えた。それが、鶴田恵吉氏によって編集された「大原幽学全集」⁽²⁾になると、「全集」のあやまりがかなり訂正されているものの、それでもまだ充分でないところがあつた。学問的研究のためには、しっか

りした底本が必要なことはいうまでもない。幽学研究も一部の好事家の趣味的関心にまかせておいたのでは、問題にならない。そういう空気を反映してか、岩波から「日本思想大系」が刊行された時、幽学の「微味幽玄考」と「義論集」が収められることとなり、中井信彦氏の厳密な校訂による正しい本文が活字化されるにいたったのは、まことに幸いなことであつた。ここに、この二作の底本ができたのである。幽学研究もようやく本格的になってきた感じである。これは、よろこばしいとして、菅谷家に異本があるとすると、ほかの性学関係の家などにも同種のもものが存在するかもしれない。そういうことの調査と研究も今後大いに必要になるであろう。

3

菅谷家の幽学文書のうち、わたしを小おどりさせるほどよろこばせてくれたのは、幽学や門弟たちの書簡が三、四十通あつたことと、又左衛門政興の日記・聞書・紀行の類が十八冊ほど、政興の子又左衛門（この人は「又左衛門」を本名とした）の日記・紀行類が十七冊ほどあつたことである。幽学と門人遠藤良左衛門・本多元俊その他の書簡は、すでにかなり多数活字化されて親しまれているが、右の三、四十通は未発表のものばかりである。これらは性学史のブランクをうめる可能性をふくむ価値あるものである。又左衛門政興の日記・聞書・紀行は天保九年（一八三八）から元治元年（一八六四）まで二六年にわたる（断続的であるが）もので、性学の興隆期から受難期、さらに幽学死後数年間（政興は元治元年十二月四八歳で死去している）の記録であり、小前夜の地位にあつて、性学活動の中心的存在だった人の体験記であるだけに、これらはきわめて貴重なものである。つぎに、政興の子又左衛門の日記類は明治二年（一八六九）から同十四年（一八八一）までのものであるが、幽学死（安政五年（一八五八）三月）後の二代目教主遠藤亮規時代とその終焉（亮規は明治六年（一八七三）八月死）までの性学の動き、三代目教主石毛源五郎

時代における内紛状況の記述——又左衛門は反石毛の造反者であったから、自家の生活記事の中に内紛の経緯が織り込まれていて、それが性学崩壊の歴史を語ることにもなっているのである。ともかく、父子二代にわたる以上の記録は、性学史の文献として尊重すべきものといっているだろう。

大原幽学と性学の研究をするためには、幽学執筆の文書を読んだだけでは、もちろん不十分である。進んで門人たちの書いたものなども広くあさって、多面的な考察をするようにしなければならぬ。もっとも、幽学の門人たちには、文字のある人はきわめて少なかったから、文書として残されたものもごくわずかであろうと思うが、それをできるかぎり拾収する仕事も怠ってはなるまい。幽学門人の書いたものとして、長沼性学の中心人物だった成毛五郎兵衛の「在府日記」(別名「江戸日記」)はいわゆる七か年厄難期の詳細な記述で非常に貴重なものであるが、研究者もあまりこれを活用していない様子が見えるのは残念なことだ。

さて、話を本筋にもどそう。今のべた又左衛門政興の聞書の中から、一つの重要な事実を発見したことを、まずわたしは報告したいのである。それは、安政四年(一八五七)一月から十二月の「聞書」(表題は「聞書」だが、実際は日記である。)の中で、幽学が自己の生年月日を語っていることである。幽学は嘉永五年(一八五二)八月十二日、幕府の勘定奉行からの差紙で江戸出府を命ぜられ、裁判を受けることとなり、ここに厄難期がはじまるわけであるが、出府した幽学は江戸住いしながら取調べを受けることになった。しかし、裁判はなかなか決着がつかず、五年目の安政四年(一八五七)を迎えたが、その頃、幽学は許されて長部村に帰村していたのであるが、この年は幽学の六十一歳(数え年)にあたるので、門人たちの間に彼の生まれた三月を期して還暦の祝いをしたという希望が強く出ていた。(當時は数え年六十一歳の年に還暦の祝いをするのが一般の習慣であった。)ただ、この時は厄難の最中で困難はつる

ばかりで、道友は減る一方であったけれども、幽学はこの次出府命令があれば、どんな断罪を下されるかわからず、ふたたび長部の地をふむことはなくなるかもしれないと考えているらしいことを察した門人たちは、ぜひ三月に迎える幽学の誕生日を期して、還暦の祝いを行うべく準備をすすめていたのだった。そのことについて、「聞書」三月五日の頃には、次のごとき記事が見える。

「三月五日

小前夜。大先生(幽学のこと)賀之祝の相談極ル。先生(幽学のこと)誕生。日たしか憶おぼ二巳年三月十八日ト覚は工候ト御咄はニ御座候。取越、当十七日ニ内祝ひニ致し、一同揃而御供上おそ、游あそニ致ス相談也。外ニ、長部村之相談有り。」(傍点は柴田、以下同様)

小前夜とは小委員会とか幹事会とかにあたり、性学の執行機関で委員の数は七人位であった。このほか、中前夜・大前夜というのがあったが、大前夜は総委員会とか総幹事会にあたり、中前夜はその中間の委員会のようなものであった。性学の運営はこういう委員会組織で行なわれていたのである。さて、五日に小前夜を開いて還暦の祝いを実施することをきめたのであるが、その時幽学は「自分の誕生日はたしかに巳年の三月十八日だとおぼえている。」と語ったという。「巳年」とは、幽学がこの安政四年に数え年六十一歳になったとすれば、逆算すると寛政九年(一七九七)丁巳の年にあたる。その年の三月十八日に生まれたと本人が証言したのである。この証言は重大である。

幽学の生年が寛政九年であったことは、多くの伝記や研究書に記載されている。また、月日については、一、二の書に三月十七日というように書かれている。だが、これらはいわば伝承によることである。幽学は浪人であったにちがいないが、それもいわゆる無宿浪人の身分だったから、戸籍証明があるはずはなかった。ところで、わたしが幽学の誕生日

を「三月十七日」と書いてあるのを見たのは、白神美春の筆に成る「八石伝来記」⁽³⁾の書き出しの次の文章中においてであった。――

「畏クモ教ノ大祖、大原幽学尊師ノ御事跡ハ其上ミ尾州名古屋ヲ領シ給フ徳川亜相公ノ御内ニシテ、禄三千石給ハリシ大道寺ノ御家ニシテ、寛政九歳丁巳ノ弥生十七日ニ生レサセ給ヒシモ、兄君在シテ次ノ御子ニ渡ラセラレシトゾ。」

この文書の奥書によると、白神源助美春は長門国阿武郡柴福村の者で、明治二十三年（一八九〇）一月に筆録したということである。白神美春は明治八年（一八七五）に入門した男で三代目教主石毛源五郎の片腕として、性学の宗教化のために活動し、内紛を激化させた問題の人物である。白神が幽学の誕生日を「弥生（三月）十七日」と書いたのは道友間の伝承によったものであろう。そして、道友たちは、安政四年三月十七日還暦の賀の祝を行なったことにもとづいて云い伝えたものであろう。さて、幽学の還暦の祝いはどのように行なわれたであろうか。「聞書」の記事のつづきを見よう。

「（三月）十七日。

賀の祝、男不^ハ残^ラ弁当持ニテ八石行、休。尤、内祝ひニ付休。大先生より短じやく（短冊）一枚宛参り候者江は被下并御供添遣ス。

十八日

女共同様、弁当持ニ而集り休。尤、御供遣ス。」

すなわち、祝いは男女別に、十七、十八の二日にわたって行なわれ、弁当持という質素なやりかたで幽学からは俳句⁽⁴⁾を書いた短冊と祝いの餅を出席者にくばったというのである。

以上を復習すると、幽学は自分の誕生日は「慥ニ」「巳年（寛政九年）三月十八日」であるといったが、それを「取越」して、十七日に女組の祝いをしたのである。性学では男女混みで会合を開くことは法度とされていたから、二日にわけたのである。しかるに、いつも主体をとる男の

会を十七日にやったので、幽学の誕生日は三月十七日だとされてしまったのではないだろうか。木村礎氏も「三月十七日」説を取っておられるが、氏はそのことについて、

「（幽学の）死の前年、安政四年三月十七日、門人が幽学の『六十一の賀を祝』っており、その関係文書がある。またこのことから、彼の誕生日は『三月十七日』とされている。」⁽⁵⁾

と書かれている。「関係文書」とはどういうものであるかわからないが、又左衛門政興はきわめて忠実な門人だったから、いいかげんなことを書き留めたとは思われない。しばらく疑いを存しておくが、わたしとしては「十八日」説をとりたい気持がするのである。

4

さて、ちょっと唐突だが、わたしには大原幽学という人間が不思議な人物に思われてならないのである。といっても、摩訶不思議というわけではないが、彼の出自は明確を欠いているけれども、これまでの定説としては、尾張徳川家の家老職大道寺玄蕃の二男として生まれたが、六歳の時名古屋居住の大原左近という浪人（元尾張藩家来という）の養子となり、十八歳のころ一家離散の憂き目にあい、以来浪々の身となり、遂に家を成さず、したがって子もなく天涯孤独の世を終ったということになっている。死ぬまで浪人であったが、武士としてのたしなみを堅固に守りつづけ、決して身を持ちくずすことはなかった。彼はその生涯のほとんどを庶民の中ですごし、庶民と親しみ、庶民に愛され、しかも庶民化することはなく、庶民とは一線を画して、終始武士としてのプライドに生き通したのである。ところで、彼の生きた時代は幕末変動期で、不穏な空氣がみなぎっていて、とくに浪人たちは不平不満をいだかざるをえず、破壊行動に出たところである。しかるに、幽学は幕藩体制を絶対的のものと思いこみ、永遠不変のものと信じてうたがわなかったのである。のみならず、この体制こそ無上の理想的システムだという信念

のもとに、庶民をその忠実な信徒たらしむべく、六十年の生涯を捧げつくしたのである。浪人でありながら、なぜそれほどまでに幕藩体制に忠誠をつくさなければならなかったのだろうか。どうしても不思議に思われるのである。

幽学は六歳の時に大道寺家を離れ、浪人大原左近の養子になったのだから、幼時の六年間だけ武家の家族として多少の恩恵を受けただけで、家臣として禄を食んだというわけでもない。その後は浪人の子として、幕藩制から除けものにされ、十八歳以後は一家離散したため、無宿浪人というひどい烙印を押され、一生を不遇な日蔭者としてすごさなければならなかったのである。体制には深い怨みこそあれ、愛情など持てなかったはずである。むしろ、進んで社会変革を期望してしかるべきであろう。ところが、彼にはそういうところは少しも見えなかったのである。

わたしは最近必要があつて、幽学の主著「微味幽玄考」その他を読みかえしてみたが、彼が言葉をつくして幕藩制を賛美し、家康以下將軍たちを神格化し、あるいは聖人化し、諸大名までも絶対視し、武家階級を理想の人種であるとし、今の体制こそ間然するところのない不動の理想的組織体と信じているのに、改めて驚きを感じたのである。それは、たとえば次のような調子である。――

「万々歳天下泰平に治まりて有るには、帝を始め、將軍家・諸武家皆万代不易なれば、万々歳天下泰平也。――今亦此の法の世に立ちし始めは、所謂天下大乱の中へ神君方出まして、天下に比類無き大仁徳を以て、軍を鎮むるの明君三世統がせ給いて、漸々是に至りし也。其の所以は三君とも毫髪も私の為ならず、唯々天下の民を憐み給ふての思召故、……其の愚・讓・怯・謙を以てし給ふ事の大きいなるは、又世に類あるべからず。……其の時天下の大小名も亦明智の方多き故、其の恩謝を厚く承はられて、相ともに天下の民を憐み、是れが為に自ら天下の礼立ち、愚・讓・怯・謙の四つを以てする事、自ら天下の武家

に充ちて、是れを世々伝へ、私の意を以てせざる事、今の世の武家に自ら能く備はりて有る也。」⁽⁶⁾

こうして、彼はいわゆる神君によって作られた秩序社会を完全社会と考え、とくにそれが「大仁徳」による無欠の道德社会たることを強調し、支配階級が模範的な倫理階級たることを賛美するのである。そして、彼はしきりに彼の理想とする倫理綱領たる「愚・讓・怯・謙」の四イデオが支配階級によって体现されていることを力説するのである。しかも彼はこれが作為の社会ではなく、天の法則にかなった自然社会であることを、

「明神君方以来、所謂万々歳天下泰平の法極りたるは、彼れが為すとも無く、是れが為すとも無く、唯天下の衆民をして、聖人の如く自ら誠明らかなる事に至りたるにおいて、則ち万代不易たるものなり。」⁽⁸⁾と説くにいたっている。こうなると、彼の論旨は、幕藩制始動期に儒教の論理をそのまま新体制にあてはめて、これこそ天の意志にもっともかかった、もっともナチュラルで、したがって至上のありがたい秩序たることを強調した御用学者林羅山の論法と同じ次元に立っていることをいやでも肯定せざるをえなくなる。それに、「愚・讓・怯・謙」という心法は、きわめて非政治的、非権力的なものであるはずなのに、それを支配者の内具倫理とするなどは、どうもただけない感じだ。幽学の地位身分が体制側にあるならば、こういう論理を使うのも当然かもしれないが、一介の浪人にすぎない幽学であつてみれば、異様に思われるのである。

しからば、幽学はなぜこういう姿勢をとるにいたつたのだろうか。それは彼が庶民教育者だったからということが、まず考えられる。彼は「武士」として庶民にのぞんだのである。だから、高い姿勢をとつたのである。庶民に対するばあいの彼は、武士的高位をとって、上から教えたのである。そのばあいの彼は武士階級の使徒であつた。つまり、支配者

側の人になった。庶民は上からの風にはなびきやすいものである。庶民は長いあいだそうなるように訓練されてきてもいる。もしかりに、彼が両刀を脱して庶民の仲間入りをして教化に努めたとしても、あれほど多くの民衆を感化することはできなかったにちがいない。もちろん、それには、庶民の心を十分に汲みとり庶民の幸福をはかる教育をし、また幽学自身に強い教育力があつたからにちがいはない。

だが、わたしはもう一つ、別の面から考えてみたいのである。幽学は武家の生まれとはいえ、真の武士としての生活体験は持たなかった。だから、武士の現実には知らなかったと考えられる。彼も普通の武士とのつきあいは多少あつたから、間接的な知識はあつたろうけれど、武士生活の真相は体験していなかった。彼の養父大原左近は浪人だったというが、過去に武士生活の体験はもっていたろうから、幽学も養父から聞知したことはあつたろう。養父も浪人であるだけに、養子の幽学を将来武士たらしめるべく、きびしい薫陶をしたにちがいない。しかしそれも、一家離散となり、無宿浪人に落ちてしまつては、希望もなくなつてしまう。

もっとも、幽学が房総へ来遊した天保三年（一八三二）ころ、尾張藩から帰参の沙汰があつたが、応じなかったという話があるが、はたして事実かどうか、わたしは、否定的である。浪人というものはおそらく真の武士の地位を得たいと念願しているにちがいない。幽学もおそらくその願ひをもっていただろう。それは、養父の切なる遺命でもあつたにちがいない。しかも、それは実現不可能に近い。とすれば、見果てぬ夢となり、あそこがれの心情のみが残る。しかも、武士生活の現実を知らないとするれば、武家生活を美化し理想化して考えることも自然ではなからうか。時は幕末であり、武家の生活はかなり乱れていたのである。必ずしもあそこがれの対象とはなりえなかったはずである。それなのに、あのように手ばなしの賛美をしたのは、憧憬の心情が働いていたのではなからうかと想像されるのである。

5

幽学は武家階級を上智階級と考え、庶民階級を下愚階級としていた。上智は正しい倫理生活をいとなむ有識者であるのに対して、下愚は全く反対で、教養も至って低く、道德意識に至っては、利欲のかたまりで、至極陋劣であるとする。そのような下愚を救うには、上智を模範としてレベルアップをはかるようにしなければならないというのが幽学の基本的思考である。つまり、庶民自体から発想される理念ではなく、上からの天下り倫理によって教化をはかろうとするわけである。もっとも、彼のいう「道」の理念は儒教倫理を源流とするものであるが、それが理想的な形で武家社会に具現されていると見て、だから下愚たる庶民は上智たる武士に倣うべきものとするわけだ。幽学は武士をアウフヘーベンして、その先きに新しい人間像を考えようとしたわけではなく、武士そのものを理想像としたわけだから、早い話が幽学自身が庶民の理想像になつてくる。そういうことから、若い門人たちの中には、幽学にならって独身を守り道に殉じようとする者が何人も出てきたが、（「義論集」参照）さすがに幽学もこれをさし留めたという話も残っている。

幽学のねらいは、庶民を武士の心位にまで高めることだった。彼が「義」と「信」の大切さを説いたのもそのためだった。性学では毎年十二月に元服の式をあげているが、それも武士的精神を若者に植えつけるためだった。弘化四年（一八四七）正月、幽学は元服を終った十二名の少年たち（遠藤良左衛門の子良祐、林伊兵衛の子正太郎ら）を引きつれて、九十九里沿岸の屋形村へつれて行って、宿泊訓練をしているが、それは、屋形村の道友の空気が「いかにも士服だからよい。」という理由によることだった。⁹⁾

性学では門人に神文を書かせて誓わせていた。なぜそんなことをしたかについては、

「神文は神君の（徳川家康）の御直家来に成る腹でなければ、とても

だめだ。神文を御先祖に備へて拝礼さすべし。」¹⁰⁰
と教えている。「御直家来に成」れとは、徹底している。

幽学が武士を美化していたことは、前述のとおりだが、幽学の生まれ
た大道寺家の一族に大導寺友山（名は重祐、寛永二六（一六三九）―享保
一五（一七三〇））という兵学者があつて、この人は山鹿素行を師として
有名な「武道初心集」という書を残しているけれども、この書の武士観
は幽学とはかなりちがっている。すなわち、

「上古には武士と申すものは之れ無く、農工商の三民迄にて、事済み
候処に、右三民の中より盜賊と申すもの出来て民人を悩まし苦しめ候
得共、三民共の力を以て是を防ぎ申す義罷成らざるを以て、打寄り相
談を遂げ、同じ農人の中におるても筋目を直し其人をえらびて、士と
名付け農業を止めさせ衣食住の三つ共に何の不足も之れ無きごとく三
民の厄害に仕り賊を防ぐ為の役人と定め、三民の輩の上座へ立てて御
侍と申してあがまへうやまふごとくに致すに付、（中略）然者、武士
と申すものは三民の輩に安堵の思ひをなさしむべきが為の役人に紛れ
之れ無く候。」¹⁰¹

武士というものは、盜賊の横行を防ぐために、農工商三民の中からえら
んで、これを護らせるようにした役人にすぎないというのである。とこ
ろが、その武士の実態はどうかというと、

「大身は申すに及ばず、小身たり共、武士と呼ぶる身としては、三
民の輩などに対して無理非道の仕形としては仕るまじき道理なるに、一
向左様之れ無く、農人へは無体なる収納を申し懸け、其上に種々の過
役をあて取りつぶし、職人に物をあつらへば其作料手間代をもららず、
町人商人などの手前より物を調べては、其代物を無沙汰致し、或は金
銀をかりても横に寝てかり取に仕ると有るは、武士の本意にはづれた
る大不義と申すべく候。（中略）盜賊をいましむる役人たる武士とし
て、盜賊の真似を仕るべき様とては之れ無く候筈の儀也。」¹⁰²

のごとき状態であるとする。これは、こんなことがあつてはならないぞ
と戒告している形を取っているが、そういう現実があればこそその戒告で
あろう。友山の武士観のほうがはるかにリアリティーがある。盜賊を鎮
めるはずの武士が、みずから居直つて盜賊になっているという指摘はま
ことに鋭い。幽学の武士観とはまるでちがう。しかし、友山といえども、
武士と庶民との身分差まで無視しようとしたわけではない。

「武士と申すものは心に義理筋目を立て形に作法を乱さぬごとく仕ら
ずしては叶はず候。故に、三民の輩とは格別の様子之れ有る事に候。」¹⁰³
というようにいつている。友山も浪人をしていたが、兵学者として諸侯
の賓師に招かれることがあつたので、立場は幽学とはかなりの相異があ
つた。大道寺家の出であると考えられる幽学が友山の影響を受けたであらう
ことは推察されるけれども、研究者の中には幽学が山鹿素行の古学派に
属すると見る人もいる。幽学の死生観には友山の影響があるように思わ
れるが、古学派とするのはどうかと思われる。というのは、幽学はどう
考えても朱子学派だからだ。

幽学は常住座臥、武士の身分を崩そうとしなかった。便所へ行くにも
刀をはなさなかったと、みずから語っているほどだ。¹⁰⁴江戸裁判の間は兩
刀を取り上げられて、無腰でいなければならなかった。どんなにつらか
ったか、察するにあまりある。庶民の中にいることの多かった彼は、そ
れ故にこそ武士意識がいよいよ強くなったとも考えられる。門人たちと
は談笑していても、いざとなると身分を冒すことを許さなかった。安政
四年（一八五七）十月、いよいよ裁判の判決も近いことになって、いか
なる断罪が下されるか、幽学が有罪となれば、良左衛門以下在府の門人
たちも覚悟しなければならぬが、幽学は必ず切腹するにちがいないこ
とを門人たちは知っていた。そうだったら、良左衛門たちも後を追うつ
もりであった。そのことを察した幽学は、

「予が頼む事ハ、親父（林伊兵衛のこと）も良左衛門も予と身分が違ふ。

「自殺させる事は出来ない。」⁽¹⁵⁾

といって、自殺させぬようにした。これは幽学が一人で責任を負おうとし、門人たちを巻きぞえにするのは可哀そうだという気持ちもあったろうが、「身分が違ふ」から自殺させるわけにはゆかないという云いかたには、考えさせられるところがある。つまり、切腹は武士のすべきことであって、庶民のすべきことではないというわけであるが、それを少し強めていうと、庶民など身分の低い者には、切腹する資格などないということにもなり、また、武士たる者が庶民を道づれにしたとあっては武士の名折れだという意識があることになる。切腹は武士の名誉であり、特権であるということにもなるだろう。そして、幽学はその年十月二十三日奉行所によび出されて百日押込の判決を言いわたされ、直ぐ小石川の高松彦七郎邸で謹慎に入り翌安政五年（一八五八）二月五日に満期となり、同二十七日長部村へ帰着、三月八日自刃を遂げたのである。

ところで、わたしは、菅谷又左衛門（政興）の「留守日記」と題された日記の弘化四年五月十一日の記事中に、左のように幽学が語ったことばを読んで、思わずギョツとしたのである。

「どのやうな事にこ（凝）つてきても、気の抜かれないといふは無いといふ腹に成ったといふ味ひ、又、友達の腹を切った味ひ、おらもあのやうになりたいと思つた味ひ。」

一度は軽く読みすぎしたが、ハッと気がついて、もう一ぺん読んでみてびっくりしたのである。友達が切腹したのを見て、「おらもあのやうになりたいと思つた」というのである。これは幽学が武道に熱中していた少年時代の思い出なしの一節であるが、正におどろきである。切腹する友達を見て、自分もあのような死にかたをしたいとは、異常である。つまり、彼は少年時から、切腹を理想としていたのである。切腹は彼にとって最大の美学であったのだ。武士へのあこがれ、切腹へのあこがれ、そこに彼の生き甲斐があったというわけで、正におどろきである。

6

わたしが幽学を不思議な人物といった意味は、以上のとおりである。これは不思議というよりは、異常というべきであるかもしれない。幽学という人は常に死所を求めて生きていたやうな気がする。つまり、死ぬために生きていた人だ。幽学は四千人の弟子を持ちながら多くの弟子にそむかれ、幕府から罪人の烙印を押され、孤独の自殺をせざるをえなかった。又左衛門政興の嘉永六年の日記（この日記には題がつけられていない）を見ると、四月十八日の条に、

「猶又、十八歳より骨折り、是迄丹精致して、今、腰繩二而、其上大小取揚げられ、此の上の恥ハなく……」

と幽学が述懐したことが記されているが、その彼が最後に残したことばは、成毛五郎兵衛の手記した「在府日記」によれば、「捨て難きは義なり。」であった。⁽¹⁶⁾（このことばを彼はひそかに脇差に刻んでおいた。その文字は「難、捨者義也」となっている。）「義」は彼のもっとも重んじたモラルであった。彼はこの一字に命を賭けたのであった。彼はどういう気持ちで死んだのであろうか。「在府日記」を見ると、さすがの彼も時に愚痴めいたことばを吐いた形跡はあるが、最後の最後まで弟子たちを叱咤し一歩も退かぬ気魄を示していた。彼の残した遺書類を読んでも、淡々として水のごとき冷静さを感じさせられる。しかし、胸の中はどうであつたろうか。無限の悲愁に泣いていたのではないだろうか。「ひとまなげきのふかければ、いよおもてぞしづなかる。」（高橋元吉）これが彼のいまはの姿だつたと思われる。

幽学も幕藩体制に押しつぶされた非命の一人だつた。しかも、体制に對し何一つ文句をつけず、黙って武士の道を守って死んでいったのである。ここで、わたしはどうしても同じ非命の人渡辺崋山を思い出さずにはいられない。崋山は同じ武士でも幽学とはちがって、小なりとはいえず田原藩三宅家（一万二千石）の家老であつた。それが、例の蜜社の獄事

件で切腹を遂げたのである。それは、天保十二年（一八四一）十月十一日のこと、幽学の死より十七年前のことであった。華山の死について、杉浦明平氏は「芸術的にも、政治的にもじぶんを抑圧し、さいごに自殺にまで追いこんだ体制に最後まで忠実そのものであろうとしたことに、わたしたちはいたまじさをおぼえずにはいられないが、誠実な華山には他の道はなかった。」と評している。華山は画家であるから「芸術的」といつているが、それを「生活的」とか「教育的」とかの語に言いかえてみたならば、そっくり幽学のばあいにもあてはまると思われる。同じように誠実だった二人には、全く「他の道はなかった」にちがいない。武士に生まれたが故に、武士を通さねばならなかった悲哀というよりほかないであろう。しかし、華山は自刃の前日、椿椿山あての遺書のおわりで、「数年之後、一変も仕候ハバ、可^レ悲人も可有^レ之也、極秘永訣、如此候。」と書いて、時勢の变革を予想し、当局への怨みを遠慮深くもらしている。これが精いっぱい^のレジスタンスだった。ともかく、華山はこうして人間的な感情表出をして死んでいったが、幽学の遺書にはそれすら見られない。幽学の遺書は事務的ですからある。華山は当時もっとも進歩的なイリテリであったから時勢の見通しも持っていたにちがいないし、しかも不当な所罰をされて、縲^る紲^せの苦を受けている。当然、憤懣と屈辱感があったと思われる。「数年之後云々」はそのわずかな露頭にすぎないとも見られる。幽学は華山のようなインテリではなく華山ほど敏感ではなかった。しかし、幕藩制を絶対のものと信じこみ、神君の忠臣たることを誇りとしていた彼も所罰への不満は大きかったにちがいない。だが、彼はその気持を表出していないのである。それは、彼が若いころ感情を殺し切る徹底的な鍛錬をされたため、自己規制力が強くなっていたためとわたしは考えている。

ところで、インテリ武士―島崎藤村の言いかたを借りれば、武士的新人というべき華山は、長男立への遺書には、「餓死るとも、二君に仕ふ

べからず。不忠不孝父登（華山の名）」と書きのこしている。これは武士的新人らしからぬ、苗武士さながらの遺言である。なぜこんな遺言をしたのであろうか。これも不思議である。ちょうどこれと同じような言い渡しを幽学は養父から受けているのである。それは十八歳の時、家を脱出した時であるが、その言い渡しとは、「武士たる者猥りに身を捨つ可らず。他国の君主に仕ふる事ある可らず。民家に子孫を残す可らず。」の三か条であった。これを言いかえると、武士らしく死ね、二君に仕えるな、庶民と婚を結ぶなということになる。幽学の養父大原左近はもと尾張徳川家の家臣だったというが、養父の熱願は幽学をして尾張藩に仕えさせることであつたようだ。「餓死すとも」とはいつていないが、同じような要求だ。華山のばあいは、三宅藩では名門の渡辺家を継がせようという希求がある。しかし、幽学の養父のばあいは浪人の身分にすぎない。それでも、こんな過酷な期待をかけている。武士とはかなしいものだ。この宿命を背負わされて、幽学は苦闘しつづけたのである。武士という身分と家名の下に人間を押し殺してしまわなければならなかったのが、幕藩体制の内に生きる人びとの宿命であつた。

7

大原幽学の民衆教育は、幽学その人の卓抜な人格力を核として展開されたものであつた。そのことは確然として疑うべくもない。しかし、そのかげでこれを動かし民衆の盛りあがる力があつたことを無視してはならないのである。民衆はすでに過去の盲目的愚衆ではなかった。民衆の間には、徐々に自主意識が発芽しつつあって、政治にも無関心ではなくなってきた。だいたい、下総地方は大藩では佐倉藩十一万石があるだけで、他は一万石程度の小見川藩、多古藩等があるだけで、その他は旗本の知行地が多く、その間に天領、大名の飛地が点在している状況であつた。したがって、領主の直接的な指導監督を受けることがなく、支配者と被支配者との関係は、貢租の受納関係だけといってよい、冷た

い間柄にすぎなかった。そうすると、農民たちは領主の庇護をあてにすることができないので、自分たちの力だけに頼らざるをえなくなってくる。そこに、おのずから自主性が育ってゆくことになる。そして自主性の中心は村名主となるから、名主たちの権力も強くなってくる。とくにしっかりした経済力を持つ村では発言力も強くなるから、領主の言うこともきかなくなる。それに、領主の経済状態も年とともに悪化して行っただから、領民の窮乏を救うどころか、逆に有福な農民に献金せしめることが多くなり、自然に領民に遠慮せざるをえなくなり、一々彼らの意見を聞いて事を処理するような有様にもなっていた。とくに財政逼迫の領主などは、農民の代表に領政を任せて処理してもらうようなダラシのない状況にまで追いこまれるばあいすら稀ではなかった。そうなるとは、領主の権威は地に墜ち、領民は領主の命にはしたがわなくなり、自治活動が活発になってゆくことは自明の理である。こうした背景があつてこそ、性学活動は広範囲に展開していったのである。

浪人を村におくことは、もちろんご法度である。危険分子たる浪人が農民と結びつき、暴動をおこすことは幕藩体制のもっとも嫌忌したところである。浪人大原幽学が村へ入るのは、はじめからむずかしいことだった。幽学は尾張浪人という振れこみではあつたが、実は無宿浪人であり、そのことは周辺でも気がつきはじめていた。そうすると、問題はますますむずかしくなり、無宿者を村に居住せしめ、これに農民が指導されるとなれば、容易ならぬことになる。その大きな無理をやつてのけたのも、農民たちの自主性の高まりであつた。その頃の農村は衰退の度はげしくなり、亡村の危機に追い込まれていったのに、幕府にこれを救う政治力はない、もはや農民の自力でみずからを救うよりはかはなかった。それには、誰か指導力のある人物が必要であつた。そこへあらわれたのが幽学であつたのだ。彼の秀抜な人格と教化力こそ、農民にとって大きな魅力であつたのである。

幽学は房総へ入る前に、信州の上田・小諸で教化活動をしている。それは、天保元年（一八三〇）から約一か年間だったが、短時日の間に数百人の門人を得たのをあやしまれ、翌二年の七月、上田藩から性学禁止令が出されたため、八月信州を退去している。このばあいにも身分問題がからんで疑われたことは想像に難くない。信州を離れた彼は江戸へ出たが、その年の十一月房州へわたり、それから上総の各地に滞留しつつ、翌三年には、東金から八日市場・銚子と北上して、下総地方を基盤とすることになったが、銚子に上州高崎藩松平氏の飛地があり、その陣屋侍に易学の教授をするようになった。ところが、侍たちが幽学の教授内容や身分について疑惑を持ちはじめ、幽学も怒って教授を打ち切ってしまった。それが、天保六年（一八三五、幽学三九歳）四月のことだった。この事件で幽学は房総に身をおくことに危険を感じ、退去すべく決意したもののようであるが、その前幽学に会ってその人物にはれ込んでいた長部村の名主遠藤伊兵衛は幽学を自村に招いた。これがその年八月のことである。その時、伊兵衛は幽学の滞留を懇請したもののようであるけれども、幽学の意志はかわらず、翌七年四月彼は帰西の決意を表明した。そして、その翌八年（一八三七）八月、彼は木更津から乗船しようとしたところへ、伊兵衛の使者儀七・清吉の二人が迎えに来、その涙ながらの切願に心打たれて、帰西を思いとどまることになったのである。これで、幽学と下総農民とのきずなはますます固くなり、門人も各村にひろがっていったのであるが、幽学に対する疑惑はなかなか消えなかった。はたして、また問題がおこる。天保十年（一八三九）の九月になって、印旛郡大森村の稲葉領役所から性学差止め指令が出たのである。稲葉藩の本領は摂津淀にあり、当主稲葉丹後守は老中の職にあつた。性学は邪宗門ではないかという疑いを受けたのである。これが世にいう「亥年の難」である。これも幽学の身分問題がからんでいたことはいうまでもない。この事件は性学門人たちに大きなショックをあたえた。そこで、

幽学の身分保証がぜひ必要となってきたので、非常手段をとることになった。幽学には武士の門人が何人かあったが、その中で幕府の御小人目付の職にある高松彦七郎とその子彦三郎は特に幽学に傾倒していたが、もともと彦七郎の父悦次郎は長部村の農民であって、御家人の株を買って武士になったといわれる。彦七郎は幽学より年が上であつたので、幽学を弟とすることにし、高松父子が幽学の身柄を引受けることに話がきまつた。そして、彦七郎の名義で誓書をつくり長部村役人に提出するようになったのである。これが天保十一年（一八四〇）の二月のことである。かなりな冒険である。こうしておいても、同じ年の十一月は、性学の本拠といふべき諸徳寺村の名主新兵衛（菅谷家とは別給の名主である。）から、幽学が自村に止宿することをこたへる旨の達しが出された。これに對して、長部村名主の遠藤伊兵衛から幽学の身柄は当方で引受けるからと回答をしている。

こういう風に、幽学の身分問題は性学運動と微妙にからんでいたのがある。性学が盛んになればなるほど、身分問題がシコリを大きくしていたともいえる。幽学が自殺に追い込まれたのも、この問題が相当な素因となつていたようである。幽学の教化方針は、公儀の政策にきわめて忠実で、農民たちをおとなしく支配者にしたがわせようとするものであつた。幽学は為政者のやるべきことをやってくれるので、支配者にとってはありがたい存在だったことも事実である。だから、幽学にまかせておいた方がいいと思つていた領主も多かったのである。だが、教化活動が進んで、村から村へ、燎原の火のごとく性学者がふえてゆくと、どうなつてゆくことかと不安にもなってくる。一浪人幽学が私設代官みたいになつて、為政者のいうことより幽学のいうことの方がよくきかれるようになってしまつたら、大変である。そういう可能性もないことはなかった。そこで、幕府は弾圧にのりだしたのである。動機は改心楼の建設であつたが、幽学への攻め手はやはり身分問題だった。幽学が幕府へ召

喚されると（幽学は入牢したのではない。村預けになつたのである。）門人たちはたちまち崩れだした。第一、肝腎の長部村がもろくも動揺し、それがたちまち村々へ及んだのである。しかし、中核となる門人代表たちは、さすがに踏みとどまつて、懸命に防護につとめたため、ある程度はくいとめることができた。幽学も一時は茫然としてしまつたが、やがて反撃に出、不心得者をどんどん破門するとともに、裁判中何回か許されて帰村しているが、その機を利用して、道友たちの「改革」に努め、彼が安政五年（一八五八）三月八日自殺を遂げるまでには、長部・諸徳寺・十日市場のいわゆる親村はどうやら苗態に近い状態にまでなつたようである。その間の消息は成毛五郎兵衛の「在府日記」や、菅谷又左衛門政興の日記などによって知ることができるのである。

8

今まで書いたところでは、幽学は、幕藩制を全面的に賛美肯定していて、庶民を公儀の忠実な臣たらしめることをねらいとし、また、孝道を基軸として親先祖への絶対的随順を説いて、家の永続を最大に重視していたのであるから、封建的タテ・モラルの信奉者であつたにちがいない。その点、全く前近代性の代表者みたいなところがあつた。だが、それだけであつたなら、民衆の信望を真に集めることは不可能であつたであろう。実は彼にはもう一つの近代性ともいえる面があつたのである。それは、タテ・モラルに對するヨコ・モラルの面である。彼は自分の弟子を道友と呼んでいた。これは、道学の友という意味の語である。道学とは朱子学者、山崎闇斎の弟子佐藤直方の流れの学問であつて、人間主義の実学を本旨とするものであり、スピリチュアリズムの傾向の強いものであつた。幽学は新井白蛾はくごの新井流易学を学んだが、白蛾は佐藤直方の道学派に属し、加賀藩に仕えて民衆教育に関心の深かつた人である。幽学は白蛾の孫弟子にあたるが、白蛾流道学の流れも汲んでいることはたしかである。幽学の書いたものには、時々、道学とか道門とかいう語も出

てくるが、この道学派では直方以来、「友」の觀念が重んぜられ、師弟も友であり、弟子同志はもちろん友であるという意識が強かったのである。これを受けて、幽学は「道友」の語をさかんにつかひ、友情の結びつきを強調したのであった。

ところで、当時の農民には友情というものがなかったといえる。彼らは上への従属のみが重視され、親戚同志隣家同志も反目しあうことの方が多かった。五人組というものがあっても、友愛の結びつきではなく、利害の寄合いにすぎなかった。そういう農民たちに友を発見させ、友愛を持たせるようにしたのが幽学である。幽学はタテ・モラルを不動のものとしたが、同時にヨコの連帯をきわめて重視したのである。タテ・ヨコ十文字のモラルで、いわば立体的システムの倫理社会を構築しようとしたわけである。たとえば、彼が案出した先祖株組合は家の永続を基本路線としていたにはちがいないが、同時に家と家とがヨコに連繫することと各家各人を守ろうとするもので、一つ一つの家は弱いものであるが、家連合をすれば強力のものとなる。友愛というものも、個人同士だけのものでなく、家同士、村同士の友愛關係にまでひろがってゆくことを理想としたのである。それを結びつける元づなは「道」のイデオであり、それを鞏固不変のものとすべきは「義」の精神であった。友愛は単に感情的のものであつたら弱くなってしまう。これを強くするためには意志的でなければならぬ。そこに「義」を強調する意味があつたのである。彼の「義」はタテ・ヨコ倫理の両方を貫くものであった。

前にも述べたとおり、幽学は武家社会を理想的なものとも、武家モラルを最高のものともして、これを庶民に移そうとしていた。しかるに、武家社会には友愛精神は存在していなかった。友愛の存在を許したなら、階級組織の上に立つ武家社会は崩壊してしまうであらう。その友愛を庶民の間に広めようとしたのは、正に矛盾である。しかし、この矛盾こそ彼の近代性を証明するものであった。その幽学がこんなことを言ってい

る

「大公儀に於ては、若し諸候一二人乱るとも、天下不危カラの御法有。小身は其儀に不及。故に、小身に朋友無きは危し。朋友に信を尽して、其危きを遁る所此也。」¹⁰⁸

小身者は友人同志「信を尽して」結びあうのが危険からのがれる方法であるという。弱小なる者は孤立しては駄目である。團結しなければ力とはならない。そのことをいっているのであらう。これを小大名から庶民個人にまで移してゆけば、友愛精神は社会的連帯へ向かつてゆくことになる。そこまで考えた幽学には、社会主義的意識の芽えがあつたとさえ思われてくる。

幽学は友誼の大切さをしきりに説いた。朋友とはどういうものか。

「相互ひにたのもしく思ふに至りては、互ひに其善に至るを見て、是を樂みとする其志の同じきに感ずるを指して朋友と称す。然ば、其信もなくて、或は諸芸の爲に唯席を同じくし語るのみを、何ぞ朋友と云はんや。」¹⁰⁹

このように、「其善に至るを見て、是を樂みとする」ほどの必要性をいう彼は、友を道に入らしめるためには、進んで「争友」となれともいう。性学では「友吟味」ということが奨励されたが、これは、お互いが親身になって相手の長所短所を率直に批判しあい向上をはかるという方法である。この方法をとれば、互いに相手の人格を尊重しあい、相手の意見を重んずることになり、「何事によらず、朋友と相談してからで無くてはやらないと定むべし。」¹¹⁰と協議重視となり、「亦、衆説の両端を執るには、自分で簡付けようではないかない。必々自分独りの了簡を用ゆる事なかれ。」¹¹¹と独断を排撃することにもなる。そういう考えかたから幽学は村役人の心がけを次のように説いているのである。

「兎角村役人を勤るニハ、自分了簡を用ひず、村中之者に智恵をかりて事を計らふが第一也。猶亦、御上へ出ても、何事によらず私は不器

量なもので御座るから、一応村方へ相談之上御挨拶申上とう御座る。一先づ日延べを願へば、其方が上への通りが宜しいと被申聞候。猶亦、帳外杯願ふ事ハ二三度も村役人ニて異見も加へ、其上、聞入ない時ハ、此通りの書附を以て願ふがよいかと、当人へ得と屈服之上願ふとも、人間一人捨る事を軽々しく致してハ御上へ対しても済まぬ事也。」²²

これは、諸徳寺村の村役人だった菅谷武左衛門がある村民を帳外つまり人別帳からはずし無宿にしてしまう問題について、幽学の教えを乞うた時、それに答えたことばであるが、村民たちの意見を充分聞くようにし支配者へは適当に言つて引き延ばし、本人へも充分納得させた上で処理するようにせよと示教しているのである。「人間一人捨る事を軽々しくしてはならぬとは、当然のこととは言いながら、人民側に立つて、人民の意志を重視しようとするデモクラット幽学の姿勢が見えて、うれしさをおぼえるのである。彼は村のことばかりでなく、家政についても、一家中で相談して事をきめよと教え、また、性学の運営も小前夜、中前夜、大前夜という三段階の協議体制でのぞみ、人材本位で仕事をすすめるように指導した。

性学の道友たちは、幽学の指導によって交友のよろこびを味わうようになっていた。それは新鮮で張りのあるよろこびであった。仲間で語りあい、仲間といっしょに仕事をする楽しみを彼らは知ったのである。それも、自村だけでなく、他村との交流ができるのは、すばらしいことだった。それがやがて改心楼の建設運動(嘉永三年(一八五〇)三月)となつて、民衆の交友プラザをつくりあげたのである。幽学はこの建設には賛成しなかったが、門人たちは説き伏せて実現にこぎつけたのである。それは、民衆のエネルギーの爆発であり、自立意識の具現であった。かくして、長部は農民たちのメッカとなり、月一回の大会には弁当持ちで集まってきた交友を楽しみあったのである。それも、今時のように飲めや歌えやのお祭さわりではなく、きわめてつつましい道の語りあいを楽しむため

であつたのである。しかも、彼らは嬉々として集まってきたようである。たしかにそれは一の人民解放運動だったのである。

9

このような民衆の運動は、やがて彼らの意識の幅をひろげ、社会意識を自覚させるようになっていった。そして、相互扶助体制が形成される機運が醸成されていったのである。その基軸となつたのは、幽学が村々に作らせた先祖株組合であるが、それは、村民の精神的、経済的連帯によつて、各家の永続をはかろうとするものであつた。すると自然に、各家の財産は各家のものでなくて、共有のものであるという觀念が生まれてくる。利己心の強い農民は、はじめずいぶん不安をいだいたらしいが、まもなく相互扶助の必要性にめざめてきて、女達までがその意識を保持するようになつていったのである。そして、たとえば長部村では「身上も子供も打込み、金銭はてんでんなれ共、人ニ任せ、亦、人の事をば能世話ニ致ス。」²³というごとき共同意識の成長にまで到達していったのである。「身上も子供も打込み」とは、家の財産も子供も道友のものと考え、道友に任せようというのである。ここまで意識が成長していたことは、むしろ驚異であらう。

なお、右の子供を道友に任せるといふ考えかたは、性学の大きな特色であつた。幽学は子供の仕込みには特に力を入れていたが、その方法の一つとして、換子教育ということをやっていた。これは子供を互いに交換して教育しあうということで、預り子教育ともいわれ、心学者小町玉川なども主張していたが、幽学はかなり徹底してこれを行なっていた。これは、子供は親ばかりの子供ではなく、社会の貴重な共有財産だから、いろいろ社会的経験を積ませようというのが大きなねらいだが、直接的には、子供を親の膝元にばかりおくと我が儘になるからということと、親たちにも他人の子供を愛する気持をもたせたいということに目的をおいたものと考えられる。

以上のごとき社会意識を道友たちに持たせるために、幽学はずいぶん骨を折ったようであるが、もっとも力を入れたのは、後継者たるべき遠藤良左衛門に意識革命を起させることだった。それについて、又左衛門政興の天保十年（一八三九）の覚書には

「良左衛門の腹は、己が家内ハ先づ捨て置き、先づ夫よりは道門、夫よりは村、村よりは外村と気がつく。是、長部村のくせ（癖）なるべし。」

という記事が見える。つまり、良左衛門の意識が、家よりは村を、自村よりは外村をという風に、より高いところから物を考えるように改革されていったのである。これはやがて道友の幹部たちをこの線まで引上げるべく指導が加えられ、さらに一般道友への波及をはかったのである。

こうして、幽学の運動は、個人の意識革命から家々の連帯へ、さらに村々の連繋へと、ヨコの広がりを含めていった。幽学の理想は遠大なものであった。彼は若者たちに対しても、性学は「唐にも天竺にも日本にも、世界立ち始めてない事だから、通さなければ恥十倍ます。通すに於ては、四海の人も道かるる事にも至られる。」²⁵ といつて勇気づけていた。だから、長部一村の改革くらいで満足はしなかった。幽学の有力な門人の一人、埴生郡荒海村の糸川平右衛門は自村に教導所を建てたが、（嘉永五年（一八五二）三月）、その時領主に出した願書の中に「御聞濟被成下置候ハバ、村内ハ不及申、御他領他村之もの迄多人数善道ニ趣き、御百姓永続可仕……」と書いているが、他領他村への普及を始めから予定して許可を得ようとしているのである。つまり、幽学の目標は「農民の間に民主的な相互扶助社会をつくろうとしていた」（原田伴彦氏）²⁶ のであり、それをできるだけ広域に及ぼそうとする抱負があったのである。それは、幽学の死後、二代目教主となった遠藤良左衛門が、江戸（東京）近江、遠江、相模の遠地にまで性学をひろめようとして異常な努力を払ったことにもよくあらわれている。

こうなると、前述のごとく、幽学は私設代官的存在になってしまい、性学領が出来てしまう危険性もなきにしもあらずなので、幕府も遂に弾圧にふみ切ったのである。これは必然の運命だったのだ。天保十年（一八三九）例の亥年の難の時、稲葉領主はその地の性学を差し留めるとともに、門人がおさめた神文を取り返せと厳命してきた。それを聞いた幽学はその地域の学頭の地位にあった長沼村の本多元俊に書きおくって、

「……性学の儀は往古より有之、予亦二十年講説仕候。撰・河・泉・幡より此国流行致し、其国々御地頭所御聞に達し有之、亦此道友数多有之、此方一人之事に無之……依而、斯成上は、豫御縄目に預り候共、御上様御明白候。不蒙御札中は神文相返し申間敷候。亦、予は其領主様よう性学御差留に附、稲葉様御領分へは立入不申候へ共、逃も隠も不仕……」²⁸

とのべたのであった。これは、かなり激越な文意である。性学は古来から伝わる天下公認の教学で、すでに私の弟子は摂津・河内・和泉・播磨地方に沢山あり、少しもあやしいものではない。だから、御縄目にあずかるうとも、御糺しを蒙らないうちは、神文は返すつもりはない。私は決して逃げも隠れもしない。というはげしい内容である。相手は幕府ではないが、老中職にある大名である。また、手紙の宛名は自分の高弟である。しかし、間接的には幕府への抗議書ともみられよう。この年、幽学はまだ四十三歳の若さだった。その後十九年たって、安政五年（一八五八）彼は六十二歳（年齢はいずれも数え年）で自刃を遂げた。すでに六十歳を越えた老齢であるからレジグネーションの心境に達していたかもしれないが、右の手紙から推察すると、おのずからその心事はわかるような気がする。いわば、彼の死そのものが痛烈なプロテストだったのでなかろうか。

注 (1)「幽学全書」には二種類ある。その第一のものは明治四四年(一九一)

発行の田尻稻次郎編「幽学全書」であり、第二のものは大正六年(一九一七)発行の田尻稻次郎編「道德経済調和之大恩人 農村経営上未聞之偉蹟 幽学全書」である。後者を研究者の間では「第二版」と称している。

(2)昭和十八年(一九四三)発行、編者は千葉県教育会となっているが、実際の編者は錫田恵吉ほか五人である。

(3)これは写本で、まだ活字化されていない。わたしの見たのは秋葉誠氏の所蔵本である。

(4)これは「うひ花の咲連れてよき日和かな」という句がある。(菅谷家の記録、および「幽学全書、第二版」一九九頁による。)

(5)木村礎編「大原幽学とその周辺」二七頁

(6)「大原幽学全集」九〇―九一頁(「微味幽玄考」)

(7)これについては「全集」所載の「残す言の葉集」(二八頁)に詳しい。

(8)「全集」九五頁(「微味幽玄考」)

(9)「全集」所載の「誓の元づな」参照(六〇四頁)

(10)菅谷又左衛門(政興)記「種々集」弘化五年五月二五日の項。

(11)大道寺友山著、吉田豊編「武道初心集」一八二―一八三頁

(12)同、一八三―一八四頁

(13)同、一一九頁

(14)成毛五郎兵衛記「在府日記」順の巻

(15)同

(16)同

(17)杉浦明平「岩波 維新前後の文学」六七頁

(18)「幽学全集」二三頁(「性学趣意」)

(19)同、二三頁(同)

(20)同、六〇五頁(「誓の元づな」)

(21)同(同)

(22)成毛五郎兵衛記「在府日記」亨の巻

(23)菅谷又左衛門(政興)記「日用集」安政二年一月十一日の項

(24)この覚書には表題がつけられていない。

(25)「幽学全集」六〇五頁(「誓の元づな」)

(26)菅谷家文書「荒海村、教導所願書写」

(27)原田伴彦「日本史概説下」一〇〇頁

(28)塚本平太郎氏所蔵、この手紙の日附は「亥(天保十年)十月廿八日」差出人は「大原静斎」(静斎は幽学の別号)、宛名は「本多元俊兄、其村道友中」となっている。